

5歳児黄2組 指導案と振り返り

「みんなのためにお楽しみ会をしよう」

奈良教育大学附属幼稚園 教諭 河合理沙

◎子どもの姿(黄2組 男児7名 女児14名 計21名)と育ちの読み取り

・2学期半ばから、お店やさんごっこを楽しんでいる子どもがおり、毎日のように商品を作っては売り出していた。紙で作ったお金でやりとりすることが楽しく、商品やお店の構造は簡単なもので行っていた。遊んでいくうちに、「ぶどう組さん・いちご組さん(年少3歳児クラス)に買いに来て欲しい」と思いを持って誘いに行ったり、「なかなか売れない」と悩んで、店の位置を変えたり、商品に少し自分なりの工夫をしたりする姿もあった。人とのやりとりの中で力を発揮できるようになるとともに、遊びを継続しながら自分たちで展開するようになってきている。また、自分たちだけではなく、年下の子どもにも視野が広がり出している。

・お店やさんをしている子どもの誘いに応じて、ぶどう組の数名が何度か買いに来てくれたことで、店員とお客さんのやりとりをすることが楽しくなり、普段お店屋さんごっこをしていない子どもも、商品作りをしたり、店番をしたりと、かかわりをもとうとするようになった。また、お客さんとしての対象がはっきりとし、「女の子が多かったから、かわいいのにした」と商品を作り替える様子もあった。

・みんなと一緒にする活動で、ぶどう組の子どもたちと一緒に遊ぶ機会を持った際には、「バルーンを一緒にしたいな」「鬼ごっこも好きやと思う」「お店に買いに来てくれたから、お店しよう」など一緒にしたい遊びや、ぶどう組の子どもたちが好きだと思える遊びを出し合った。それと同時に、何度も「でも嫌って言われたらどうしよう」という、相手を想像して自分たちが考えたことが本当に楽しめるのかを考える意見が出てきて、その度に「その時には、何がしたいか聞いて、それをさせてあげよう」と話し合っていた。当日は、パラバルーンを一緒にしたあと、店や積み木で作った船に遊びにきてもらったり、鬼ごっこをしたりすることになった。それぞれ姿勢をかがめたり顔をのぞき込んだりしながら「何したい?」と相手に寄り添おうとしていた。相手の立場に立って考え、それを行動に移そうとすることができるようになってきている。



・お金の作りやお釣りなどのやりとりにこだわりを持っている子どももおり、本人の納得のいくお金でないと、なかなか簡単に買えないこともあったが、それも面白さにつながっていた。それとともに、そのやりとりを見て、「店長、厳しすぎるねんなあ」と言っている子どももおり、「ぶどうさんが買い物できるようにお金を作ってあげよう」とお金を作って銀行を始める子どももいた。こだわりをもって遊んでいる友達の面白さを感じるだけでなく、それについて自分が感じることを表現したり、自分はどうか考えて行動に移したりしていた。一人一人がこだわりや目的を明確にもち、やり遂げようとするようになってきている。

◎ねらい

- クラスで共通の目的に向かって考えを出し合ったり協力したりして、実現させていく充実感を感じる。
- こだわりを持って作ったり、友達のこだわりを刺激を受けて取り入れたりしながら遊ぶ。

◎教材について (お楽しみ会について)

- ・例年は全園児でクリスマスという共通のものを通して楽しいひとときを過ごす目的で、クリスマス会を行っていたが、昨年は宗教的な理由からクリスマス会に参加できない子どもがいた。クリスマス会ではなく、「お楽しみ会」にすることで、誰ひとり残さずみんなが楽しむことができる。
- ・お楽しみ会の内容が決まっていないからこそ、自分たちで考えたことを実現させていく面白さがうまれる。
- ・年長児として、幼稚園の子どもたちのために力を発揮する充実感や嬉しさを感じたり、相手が喜んでくれる経験を通して自信を持ったりできる。

◎環境構成・援助

- ・それぞれのこだわりが発揮できるように、多様な材料を用意しておいたり、子どもの様子を見て必要なものをその都度用意したりする。
- ・友達のこだわりや、やろうとしていることが共有できるように、準備の進み具合を見ながらクラスで共有したり相談したりする機会を持つ。
- ・一人一人の考えや思いを尊重しながら、考えや思いを出し合ってより良くしていけるようにする。

◎ESD との関連

・本活動で働かせる ESD の視点（見方・考え方）

連携性 自分の店だけでなく、周りの店や遊び場から刺激を受けて遊ぶ。また、互いにしていることを理解しながら、クラスみんなでひとつのお楽しみ会を楽しむ。

多様性 一人一人がこだわりを持って作った商品は、どれひとつと同じものがない。1つ1つ違うからこそ面白いし、買ってきてくれた人もそれぞれ好きなものが違う。

相互性 クラスの友達だけでなく、幼稚園のみんなが楽しめるように考える。一緒に遊びながら、相手の反応を受ける。

公平性 楽しくない人がいないように、みんなが楽しめるように考える。

責任性 商品や遊び場の準備をしたり、当日もみんなが楽しめるように、反応や状況に応じてより良くしようとしたりする。

・本活動を通して育てたい ESD の資質・能力

つながりを尊重する態度 相手の立場になって考えながら、みんなが楽しめることを考える。

未来像を予測して計画を立てる力

お楽しみ会の日に向けて、やり方を考えたり必要なものを作ったりしながら準備を行う。

思ったようにうまくいかないことを、自分なりに考えたり友達と考えを出し合いながら、実現させようとする。

コミュニケーションを行う力

クラスの友達と相談しながら準備を進めたり、お楽しみ会当日には周囲の反応や様子を見ながら行動する。

クリティカルシンキング

友達と準備を進めながら、「でも～かもしれない」「〇〇だったらどうする」「こんな方法もある」など意見を出し合う。

他者と協力する態度

クラスの友達と一緒に準備を進めたり、当日の運営をしたりする。

進んで参加する態度

自分ごととしてとらえ、自分のこだわりを発揮したり、自分にできることに取り組んだりする。

・本活動で変容を促す ESD の価値観

世代内の公正

自分たちだけでなく、幼稚園のみんなが楽しい会を考える。それが自分たちの楽しさにもなる。

幸福感に敏感になり、それを大切にする

自分たちが考えて準備したことをみんなが楽しんでくれると嬉しい。

(保育者) **人権・文化の尊重**

いろいろな文化的背景を持つ子どもがおり、一人一人が大切にされるべきである。

・達成が期待される SDGs

目標17【実施手段】

◎展開

主な活動内容	予想される幼児の反応や姿
○担任から「お楽しみ会」をしようという提案を受ける	・「お楽しみ会」をすることに喜び、したいことを話す。 ・「できない」「したくない」と感じる子どももいる。
○「お楽しみ会」の内容について意見を出し合う	・ぶどう組、いちご組、そら組と一緒にしたいことや、その子どもたちが好きなことを考える。ぶどう組と遊んだ経験から「お店」「遊び場」が出てくるかもしれない。
○準備をする	・自分なりのこだわりを持って、必要なものを作ったり、場を設定したりする。 ・招待する相手の立場になって考えながら、準備をする。 ・必要に応じて、招待するクラスにお知らせに行く。
○「お楽しみ会」をする	・相手に寄り添いながら一緒に遊んだり、面白くなるように店番をしたりする。 ・必要に応じて対応やものを変えながら遊ぶ。

◎実際の子どもの姿と保育者の環境構成・援助

・担任から提案を受けて

「お楽しみ会」をしようという担任からの提案を受けて、子どもたちからしたいことが次々としてきた。出てきたのは「射的」「輪投げ」など大学祭の縁日での楽しかったことや、ぶどう組を招待して遊んだ経験からのお店やバルーン、アスレチックなどの遊び場だった。その場で何をするかを決めたわけではないが、翌日のしたい遊びの時間から「射的と輪投げをしたい」との思いを持って、大学祭で教えてもらった方法で作り、遊び始めた子どもがいた。その子どもの思いを受け止め、必要な素材を選べるように数種類用意したり、一緒に方法を考えたりした。友達が射的作りをする姿を受けて、数人が射的で遊び始めた。担任も遊びながら、一緒に方法を考えたり、互いのこだわりや工夫に気付けるように声かけしたりして、自分たちのしたいことが実現できるようにするとともに、面白さや楽しさの共有をするように意識した。「的が倒れるようにしたい」とこだわって、的を全て違う方法でいくつか作ったり、撃つ距離やゴムを引く強さなどをいろいろと試していた。

・当日までの準備

射的や輪投げを作り出した子どもたちの姿に刺激され、お店やさんをしたい子どもたちも、したい遊びの中で商品作りを始めた。「おしゃれするものを作りたいねん」との思いを持っている子どもたちもいたため、どのようなイメージかを聞き、使えそうな材料を豊富に用意した。また、こだわりのものを作っているため、綺麗に接着したり、セロテープやガムテープでは作りにくいものも接着したくなるかもしれないと予想し、グルーガンも用意しておいた。ボタンやビーズ、リボンやモールなどの材料から発想してアクセサリーを作りだす子どもがいたり、その友達の姿を見て真似したり、さらに自分なりのアイデアが出てきてアレンジしたりしながら、互いに刺激し合いながら作ることを楽しんでいた。また、ボタンやビーズは、穴に通すだけでなく、接着して作ることで出来上がった商品がより多様なものとなった。それらの商品を見て、「男の子もつけれるかっこいいネックレスがいいねん」と自分なりに対象を決めて商品作りをする子どももあり、その思いを十分に認め、実現できるように後押しした。

ぶどう組と一緒に遊んだ際に、アスレチックをしたいと思っていた子どもがいたが、当日は雨天で思うように場を作ることができなかった。今回のお楽しみ会の話をした際にも、その子どもはアスレチックをしたいと言っていた。他にも、1学期終わりにした「タベの集い」での宝探しの経験から、宝探しはどうかという声も上がっていたため、そのふたつを合わせてはどうかと考え、宝のメダルを作り始めている姿もあった。そこで、みんなと一緒にする活動の際に、アスレチックをしたい子どもたちで場を作ってみる機会を持った。今回は雨天でもできるように屋根のある場所で組み立てるように考えて作っていく中で、「黄2組の部屋につながるようにしたらどうかな」「宝探してみたいに、アスレチックにメダルを隠したらどうかな」などのアイデアが出てきた。試しに作りながら「こことかこことか、いろんなどころに置いたらどうかな」とコースの上にメダルを置く



アイデアが出てきたが、「それやったらすぐ見つかるし、ずっと持って行かないかんやん」という意見も出た。子どもたちの中で共通認識が持てるように、それぞれの考えに共感するとともに、保育者から「見つけたメダルは全部もらっているの？」と問いかけた。それに対しては、「いっぱい持っていったらみんなの分がなくなるからあかん…」、「1個だけって最初に言ったら?」「小さい子はわかるかな」と考えていく中で、「ゴールしたらメダルをあげよう」ということに決まった。翌日からは、作っているメダルが招待する3クラス分63個必要だという思いを持って、たくさん作っていた。



他にも、以前からお店やさんごっこで自分の店を作っていた子どもたちが、店の構造を工夫して作ったり、商品にアレンジを加えたりしながら、よりこだわって遊んでいた。また、射的を作っていた子どもたちも、商品を作る友達の姿に刺激を受け、自分たちが普段から作っている武器を商品にして武器屋さんをしようという姿も出てきた。他にも、友達が紙コップを逆さにして「どーれだ」と遊んでいる姿を見て、ただ商品を並べるだけでなく、「当たりを引けば商品がもらえる」という店づくりを始めた子どももいた。それぞれのこだわりで互いに刺激し合いながら、より面白いものを作ろうとする姿が見られた。

・当日(12月14日(火)年少ぶどう・いちご組、15日(水)年中そら組、16日(木)年長黄組同士)

お金にこだわっていた子どもは、今回もお金にこだわるだろう、そして年少組の子どもたちは自分でもお金を作りたいかもしれないと予測して、丸く切った紙とペンを自由に使えるように用意しておいた。また、今までのお店やさんごっこで使っていたお金も子どもたちが「銀行」として用意していた。今回も「560円」という金額にこだわって売っており、少しでも自分が思っている形のお金でないと「違う」と返したり、「おつりがないからちょうと持ってきて」と要求したりして、1日目はなかなか売れなかった。それでも本人は「もうかった」と振り返っていたが、2日目はお釣りを出したり、3日目の最後には商品が残っているのを見て、本人が思う形のお金でなくても売ったりしていた。担任はこの子どものこだわりに合わせてお金を作ることを考えていたが、本人が状況をわかりながら対応を少しずつ変えていっていた。



武器屋さんをしていた子どもは、射的・的あての遊びと兼任していたため、1日目は射的的の対応に追われて武器を売れず、「射的は大人気だったけど、武器は1つしか売れなかった」と振り返っていた。そこで、「お客さんが来ない」と困った他児が商品を並べると売れたことを伝えると、2日目は他の店のように武器を並べ、さらには持ち帰りの箱も用意し、射的のやり方を教えながら、店に客が来た時には商品の説明をするなど、動きが大きく変わった。さらに3日目の年長同士では、武器を作った本人がこだわりどころを「ここから爆弾が出る」「水陸両用で」など言葉で自信を持って説明することで、友達にもとても魅力的なものとなり、完売となった。友達のしていることを知るきっかけがあったことで、自分なりに取り入れたり、さらに工夫を加えたりしていく姿につながった。

アスレチックの遊びでは、お楽しみ会の3日間が晴天予報だったことから、保育室のすぐ目の前に作って部屋まで繋げる形になり、部屋内のゴール地点でメダルを渡すことになっていた。部屋の中にあるため、年少組はそれに気づかずに何度もアスレチックを楽しんでいた。初めは三角コーンに「ゴール」と書いて知らせたり、一緒に遊んでいる年長児がゴールまで案内したりしていたが、それでもゴールまで来ない年少児には、外に出てそれぞれの近くまで行ってメダルを渡していた。



当日は、一人一人がそれぞれの役割をその都度考え、必要な動きをしようとする姿が見られた。その根底に「相手のために」「楽しんでもらう」という目的があり、それを実現するために相手の反応を見ながら行動に移っていた。また、それに加えて「商品売り切れにしたい」「みんなにメダルをあげたい」など、それぞれがやっていることへのこだわりを実現するために、状況に応じて工夫する姿が見られた。